

“創造的な学びの機会”を提供 人文学的視点を核にしながら

横断型人文学プログラム

学科の専門の枠を超えて、今まで考えてもみなかったつながりを探索する、そんな創造的な学びの機会を提供するプログラムです。「身体・スポーツ文化論コース」「芸術文化論コース」「ジャパノロジー・コース」の3コースがあり、それぞれに独自の科目が用意されています。プログラムを受講する学生は、興味をもった分野を選択し、より積極的に知識を深めてゆくことができます。

プロジェクト・ゼミ

学生の興味にあわせて作りあげるクラス

研究テーマを定め、学科の壁を越えた複数の学生が協力してリサーチ、分析、必要に応じてフィールドワークも行うなどしてプレゼンテーションへとつなげていきます。研究成果の発表会も予定しています。

身体・スポーツ文化論コース

「からだ」から自分を、
そして世界を捉え直してみよう

文学部にあって唯一、テキストを持たない「身体」や身体表現としての「スポーツ」を、身体文化というコンテキストから新たに捉え直し、探索するコースです。従来の身心二元論的な物としての「身体Body」ではなく、身体・心・スピリチュアリティを含む「からだSoma」の視点に立つことで、文学や哲学、歴史、メディアのなかに新たに立ち現れる、多様な感覚世界として身体の在り方や、記憶や経験も含む身体イメージ、そしてそのまなざしの中心に立つ自分自身の「身体(存在)」に出会ってください。

2021年度 身体・スポーツ文化論コース代表
基盤教育センター身体知領域 吉田美和子教授

芸術文化論コース

芸術は世界を変える、
世界観を変える

映画館を出ると世界が違って見えたという経験をなさったことがありますでしょうか。ときに1本の映画が、ひとりの人間の人生を大きく変えることがあります。芸術は限られた日常を拡張し、世界や人間に関する深い洞察に満ちた凝縮体験をもたらすからです。ただしそれを十分に体験し尽くすには、見る側の準備が必要です。たった一つの切り口が、思いもしなかった作品世界の広がりを開示することがあるからです。切り口の豊かさだけ芸術体験は豊かになります。芸術文化論コースを通じて、芸術体験の質を、ひいては現実世界の体験の質を高め深めてゆきましょう。「芸術は人生を真似る。だがそれ以上に、人生は芸術を真似る」(オスカー・ワイルド)。

2021年度 芸術文化論コース代表
文学部哲学科 桑原俊介准教授

ジャパノロジー・コース

ステレオタイプに惑わされず、
多様な「日本」を見つけよう

「日本文化の特徴は？」と尋ねられて、みなさんは何を挙げるでしょうか。たとえば、日本語の特徴としてよく「敬語」が取り上げられますが、「敬語(けいご)」という言葉はどうも明治以前には存在しないようです。また中学生が教わるように、敬語を「尊敬・謙譲・丁寧」といった視点からはじめて記述したのは、外国人でした。それだけではありません。方言の分布を見ると、敬語の発達した地域と、尊敬や丁寧の表現形式が未発達のいわゆる「無敬語」の地域が日本には存在します。「敬語」という日本(語)らしい現象一つをとっても、日本国内には多様性が存在しますし、「敬語」を自覚するには外からの眼も必要だったことになります。本コースでは、日本の歴史と文化を、文学、思想、芸術などのさまざまな対象を取り上げながら考えます。皆さんもまったく新しい「日本」の姿を再発見してみませんか。

2021年度 ジャパノロジー・コース代表
文学部国文学科 服部隆教授

個別選択科目

確かな視点を養うとともに人文学の広さと深さを知る

テキストを読む

「読み方」を学ぶクラス。テキストとは、文字だけでなく史跡や遺物などの物・絵画・映像・身体など「読んで解釈できるもの」すべてが対象です。

文化交渉入門

「外来文化の受容」や自国文化を海外に発信する時に生じる「文化変容」についての理解を深めるクラス。文学・美術・音楽・演劇・スポーツなど、幅広い事例を考察します。

共通基礎科目

哲学科

史学科

国文学科

英文学科

ドイツ文学科

フランス文学科

新聞学科

身体知領域

センター
基盤教育



詳しくは《文学部オリジナルサイト》へ。 <https://sophia-humanities.jp/>



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY

他者に出会い
自己を知る

言葉を磨く

上智大学 文学部

Faculty of Humanities

● 哲学科 ● 史学科 ● 国文学科 ● 英文学科 ● ドイツ文学科 ● フランス文学科 ● 新聞学科

ドイツ文学科 4年

ドイツを舞台にした日本文学との小さな出会いをきっかけに得た、ドイツ文学を原文で味わう喜び



小笠原 智咲子
Chisako Ogasawara

一学科を選んだきっかけ

第二次大戦下のドイツを舞台にした皆川博子さんの小説『死の泉』やドイツの寄宿学校の日常が描かれた萩原望都さんの漫画『トーマの心臓』との出会いがドイツの社会や文化に興味を持った最初のきっかけです。こういう世界があるんだ、と。皆川さんと萩原さん自身ドイツ文学(特にヘルマンヘッセ)がかなり好きだということも知って、私も自然とドイツ文学やドイツ語圏の演劇に触れる機会が多くなりました。ドイツ芸術が持つ独特の雰囲気や、哲学的な世界観には心惹かれるものがあってドイツ文学科に行きたいな、という想いが強くなっていったんです。

二つの学科のことがスゴイ！

一、二年度の間に、ドイツ語の基礎固めができると思うと思います。日本人の先生方からは文法を、ネイティブの先生方からはネイティブの発音を、というようにバランス良く学べるので。

二年間かけてしっかりと学んだドイツ語の成果は、三年次からの文献演習の授業で実感できます。日本語訳では理解できないドイツ語の微妙なニュアンスや独特な文の構造、詩の中で計算つくられて創られた押韻の音の響きなどを、原文でじかに味わえるのはすごく魅力的だと思うんです。

三学びを通して自分の中に起こった変化

日本人には、遠回しな言い方を好んだり、意図せずには慇懃無礼な話し方をしてしまう傾向があると思います。実は、二年生の秋に、在外履修制度を利用してドイツに留学をした際、現地の先生からそのことを指摘されました。あなたは日本人過ぎる。もともとドイツ人になったつもりで話したり書いたりして、という先生の言葉は衝撃的でした。私としては、失礼のないように気をつけて振舞っていたつもりだったんです。ところが、他の文化のなかでは、そうした態度さが異質なものに見えてしまっ。自分が今まで当たり前だと思っていた価値観や文化が、一歩踏み出してみればまったく違ったものになるんです。言語を学ぶうえでは、その国の価値観や文化を含めて理解して、受け容れることが大事だと思うようになりました。

四学びを今後の人生の中でどう活かす？

大学院への進学を考えています。皆川さんと萩原さんを通して出会い、大好きになったハッセのことを、大学院でさらに深く研究したいです。

英文学科 3年

文法理論をコミュニケーション(実践)に結び付けていけるような英語教育を目指して



後藤 健太郎
Kentaro Goto

一学科を選んだきっかけ

中学時代は、英語の文法があまり好きではなかったんです。長期休暇明けに毎回実施される単語テストで満点を取ると皆の前で表彰してもらえたので、単語の勉強ばかりしていました。

高校に上がると今度は、数学の勉強や高校生活をエンジョイするのことに時間をとられてしまっ。受験を意識しはじめた高二の秋頃に、これ以上文法から逃げてはだめだと思って塾に入りました。するとそこで出会った先生(後に、上智の大学院の英語教授法コースを修了されている先生だったことが判明したのですが)、が、すく面白く文法を教えてくださいました。英語って面白くなって気づきはじめてから、自分も英語を勉強して教えられる立場になりたいと思うようになりました。

二つの学科のことがスゴイ！

僕が取っている言語研究コースには、教職関係の科目が理論的なものから実践的なものまで豊富に揃っています。

第二言語習得論(SLA: Second Language Acquisition)や言語学の基礎をしっかり学べて、さらに実践的な授業もあるのがすごいなと思っています。少人数制で、指導教員の先生との距離が近いのも良いところだな。

三学びを通して自分の中に起こった変化

正直、高校時代には本を読む習慣がなく、頭を働かせて文章を読むのは、現代文の授業の時間くらいでした。大学に入ってレポート執筆のために文献を参照するようになったことで、いまは、文章を読んだり書いたりするのにも慣れて、知識を得る受け皿が出来てきたという実感があります。

四学びを今後の人生の中でどう活かす？

英語の面白さを伝えてくださった塾の先生のように、上智の大学院で英語教授法(TESOL)を学んで将来は、中学の教員になりたいと思っています。僕は自身は、文法がわかるようになったことで自信を持って英語に向き合えた人間なので、コミュニケーション(実践)と同時に、昨今重視されがちな文法理論についても確実に教えていきたいな。元々話言葉としての英語は、規範文法によって統された結果、多くの人が比較的身分に問わず出世しやすいなり、その人でのコミュニケーション、主に手紙が可能なになった歴史があるので、昔の文法が持っていた利点は現代でも活きていると思うんです。

フランス文学科 3年

先人たちの書物を通して学んだ、物事を広い視野でとらえることの大切さ



大森 可菜
Kana Omori

一学科を選んだきっかけ

高校時代、英語に夢中になった時期があったんです。外国語を学ぶのは楽しいなって。語学分野に特化した勉強を大学でしたいと思ったときに、どの言語にしようか悩みました。英語はすでに基礎ができていたから、自分で伸ばせる。でも、英語以外の言語は基礎ができていないから、独りでは勉強できない。自分のなかで最も優先順位が高いと思ったのは、フランス語でした。フランス語圏に行つたことがあったし、料理やお菓子も好きだったのだ。上智のフランス文学科を選んだのは、オープンキャンパスのときに受けた体験授業の雰囲気や自分が合っていると感じたからです。楽しんで授業なら先生の様子や、先生と補助の学生との和やかなやり取りを見て、本当にフレンドリーな学科なんだな、と思いました。

二つの学科のことがスゴイ！

学科の温かさが格別で、学びやすい環境が整っているのがすごいところだと思っています。

先生方は、いつでも質問しに来ていいし、次までに答えを考えてくるね、といったように、すごく近い距離

各学科の学生の声



国文学科 3年

国文学、国語学、漢文学のすべての学びが、自分で言葉を解釈、理解する力に



橋本 零
Zero Hashimoto

一学科を選んだきっかけ

高三のときの古文・漢文の先生がものすごく厳しい先生で、予習と復習を何時間もかけてやるのはつらかったのですが、理解が深まるにつれて、この道は面白いかも、と感じるようになりました。

上智の国文を選んだのは、遠藤周作が好きだったから。キリスト教文学を研究対象にするなら、カトリックと関連が強く、資料も豊富に揃っている上智を受けようと思いました。あと少人数なので勉強に対するサポートが厚いのではないかなというの志望した理由の一つです。

二つの学科のことがスゴイ！

国文学、国語学、漢文学の基礎を、一、二年度すべて学ぶところだと思います。正直、自分の関心の外にあることも学ばないといけないのですが、結局は、全部つながるんですよ。漢文学が近代文学につながっているなら、漢文学と国語学の間にこんな関係があったんだ、というような気づきもありました。様々な観点を拾い、それらの比較や関連付けをしなから自分の研究を深めるうえで、国文学、国語学、漢文学の三つを学べたことは、大きかったと思っています。

感で接してくださるんです。授業に直接関わることで、フランス文学科の恒例行事であるクリスマス会の企画等をしてくださるのが嬉しいですね。

三学びを通して自分の中に起こった変化

学科のなかで色々な書物を読み、それらについての考察を行うなかで、度々衝撃を受けることがあります。私たちが生まれる何世紀も前に生きていた人たちが、いままさに社会で取り上げられているジェンダー等のマイノリティ問題に意識を向けているばかりか、考えたことをしっかりと文章のかたちに残していることに。

彼らに倣って、私もそういった問題に対して意識を持つようになり、マジョリティに属しているうちに出来上がったしまった自分にとっての「当たり前」に押し付けられないようにしようと心掛けるようになりまし。

四学びを今後の人生の中でどう活かす？

自分の思い込みで物事を判断して、誰かを傷つけることをしない人になりたいです。発言するときも、考え方が違えば、自分の言葉が違う意味に理解されることを念頭に置き、いかないうちにも思います。とはい、常に自分の言葉に意識を向けるのは限界があるので、むしろ、意識そのものを根本から変えることを目指したい。

自分と一緒に居て時間を共有している人が、過ごしやすい環境を創る努力をしていきたいです。

哲学科 3年

知識を得るだけでなく、自分で哲学する力が身に付く



吉田 圭一郎
Keiichiro Yoshida

一学科を選んだきっかけ

哲学者プラトンが考えた「イデア界」に美しさを感じたことが、哲学に興味を持ち、そして哲学をしたいと思うようになったきっかけです。イデア論について知るまでは、自分にとって、実際に経験しているこの世界がすべてだと思っていたのですが、この世界とは別にイデア界があるという二世界説に触れて単純に、美しいな、と思ってしまうんです。

当時は、目に見えていることや周りの環境に囚われていて、窮屈さを感じていたと思います。精神の目を他の場所に向けてという経験はしたことがなかった。でイデア論を知った時のびびりした新鮮な気持ちを抱きました。イデア界から来た我々の魂は、イデア界のことを忘れてしまっているという物語の要素を含んだ箇所にも惹かれたんじゃないかと思っています。

二つの学科のことがスゴイ！

高校倫理の一部以外の哲学的知識はほとんど持たない状態で入ったんですが、本当に哲学することを教えられたと感じています。

授業は実践的で、一年生の頃から、哲学書を読むことをずっとやっています。最初は、「ソクラテスの弁明」のような割と平易なものを読んで、少しずつ慣れていくといった具合に。

知識ではなく、哲学することに力点が置かれた授業が多くなされていると思います。

人と話す機会をすごく大事にする学科でもあります。グループディスカッションが多くて、人と話すことがイコール学びのような感覚です。自主ゼミや読書会、勉強会などが盛んで、そういった授業以外の場では、同年代だけでなく、下の学年の学生や院生との交流もあります。

三学びを通して自分の中に起こった変化

プラトンの「イデア界」から、他のことへと興味を広がったし、自分から問いを出せるようになったと思います。何かを判断するとき、その判断の基準は何だろうと、一度立ち止まって考えられるようになったかな。

わかりやすさというものを怖がるようにもなりまし。たね、安易にわかることを怖がる、とも言いますが、多くの場合においてわかりやすさが求められるからこそ、敢えてわかりにくさに迫っていききたいなって。一回でわかってしまっていて、い、何度か実践していったら、もう少し生き生きとしたそのうちわかる、といった考え方を身につけられました。

授業や研究会で哲学書を読むときは、教ページ、もしくはたった数文しか読み進められずに終わることもありますが、でも、焦らずゆっくり読む習慣が、読み方だけでなく、考え方にもつながっているんだと思います。

四学びを今後の人生の中でどう活かす？

問いを立てることは、あらゆる学問の共通点だと思いますが、哲学をするときには特に、むやみやたらに、ではなく、正しい問いを立てることを強く意識するんです。問いの立て方が適切だと、答えもすんなり見えてくるので、こういった正しい問いを立てて解決していく力は、社会に出て役立つと思います。

三学びを通して自分の中に起こった変化

高校までとは明らかに、勉強の仕方が変わりました。古い文学作品は、教科書の活字を追うのではなく、原資料にあたって古い字体(くすし字)で読まないといけないです。解釈についても、参考書に頼らず、自分の力ですることが求められるので。ただ教えられるのではなく、教えられた知識をもとに自分で調べ、情報を収集してまとめていく習慣がついたと思います。言葉や文法が、作品のなかでどういう意図を持って使われているかを考えるようになったことで、日常生活のなかでも、ひとつひとつの言葉に対して敏感になりました。

四学びを今後の人生の中でどう活かす？

いまは、SNSによって、文章が溢れる時代になったと思うんです。ひとりひとりが文章を作つて、触れる時代に、でも、そういう時代だからこそ逆に、言葉を理解する力が薄れてきているのになって、国語科で鍛えられた力を活かして、今後は、相手にどういった言葉を与えるか、その言葉の意味を常に意識しながら生きていくだろうし、この力は、社会に出て欠かせないものになると思っています。

史学科 4年

歴史学を通して培った洞察力と発想力を実社会で活かす



野中 大成
Taisei Nonaka

一学科を選んだきっかけ

そもそも、はじめは文学部志望で、周りの同級生たちと同じように、難易度の高い就活に有利そうな学部とどこかに入ることを目指していたんです。でも、僕自身は小学生のときから歴史(特に坂本龍馬)が好きで、歴史に照らして物事を考える癖があったので、実はちょっと歴史やってみたいな、という想いはありました。

そんなとき、通っていた予備校の先生から、好きなことは何だ? と訊かれて、歴史が好きだと答えました。すると、どの学部に行くにせよ、学んだ知識が社会でそのまま使えるわけではないから、自分が学びたいと思う学問を学んだほうがいい、というアドバイスを送ったんです。

二つの学科のことがスゴイ！

僕がお世話になった川村信三先生のゼミの素晴らしさが印象に残っています。和やかな雰囲気のおかげで、先生や一〇人程の学生たちと率直な質疑を交わしながらひとつの書籍を多角的に読む力を養うことができました。

川村先生は卒業論文についても早い段階から意識されていて、二万から三万文字程度の卒業論文で、問う力や全体の構成から考える力をじっくり時間をかけて身に付けられた実感があります。

川村先生からいただいたアドバイスのひとつに、読んだ書籍の内容をカードにまとめてみる、というのがあるのですが、趣味の本を読むときにも、僕はこのアドバイスを実践しています。

三学びを通して自分の中に起こった変化

柔軟な思考ができるようになったと思います。例えば、常識について。昔ではよく、「常識を疑え」と言われるけれど、この表現は適切ではない、なぜなら、世の中には疑うべき常識とそうではない常識の二つがあるからだ、という気づきを、歴史学は与えてくれるんです。

「日本は島国」というのは、疑うべくもない常識です。よね、ところが「男の子は泣かないもの」という常識は、江戸時代の武家教育から来ている。平家物語や戦国時代の記録を見ると、中世の侍や戦国武将は号泣するほど感情表現が豊かだったことに気づかれます。つまり、僕たちが当たり前だと思っていた「男の子は泣かないもの」という常識は、実は疑うべき常識だったのだと。

このように、守るべき常識と変更すべき常識の境目が、学びによって見えてくることは、思考を柔軟に、豊かな発想力へと導いてくれると思います。

四学びを今後の人生の中でどう活かす？

面接の際に、歴史学について熱意を持って語れたことが良かったのか、通信系の企業から内定をもらうことができました。

その会社の企業理念は、異業種同士・通信と他の分野)を掛け合わせて新しい価値を創るというものなので、史学科で培った洞察力を活かして、残すべきものと変えなすべきものとを適切に識別するといったような、社会をより良くする仕事をしていけたらと思っています。

新聞学科 3年

メディアを通じて、新しい価値や気づきを届けられる人に



荒尾 奈那
Nana Arao

一学科を選んだきっかけ

私は将来何をしたいんだろうと思ったときに、小中高を通してずっとやってきた一つの好きなことが頭に浮かびました。ひょっとして写真を撮ること。もうひとつは文化祭等で催しを企画立案し、皆で一個のものを作ること。それなら映像を使つて、かつ、何かを自分で企画して形にできるものは考えたときに、メディア、という答えに行き着いたんです。

上智の雰囲気が好きだったこと、自ら現場に赴いて取材と映像制作を行う実践型の水島宏明先生のゼミの存在を知ったことが、上智の新聞学科を選ぶ決め手になりました。

二つの学科のことがスゴイ！

学内にあるテレビセンターでの番組制作や、編集機を使っての編集作業のような実践は勿論実践に対する批判的、客観的な視点から鋭い議論実践に論教育がしっかりと行っているところが新聞学科の強みだと思います。

例えば、水島先生のゼミでは、あるドキュメンタリーを観た次の週には制作者の方がいらっしゃる、としてこの映像を作ったかを直接質問できる機会が設けられていたり。

社会に溢れるあらゆるメディア情報の持つ社会的影響や意味を考えることを日々学んでいます。

三学びを通して自分の中に起こった変化

物事全般について、批判的に見たり、裏側を考えると、よりになりました。ドラマや映画アニメを観ながらその時代背景や制作過程を考えたり、ニュースをチェックしながら取材のあり方について考えたり。授業やゼミで作る側の視点を知ったことで、社会に溢れている情報に呑み込まれなくなりました。情報から一歩距離を置けるので、生きやすくなったとも感じています。

四学びを今後の人生の中でどう活かす？

昨年、ミスコンを廃止し自身の魅力発信をすることを目的に新設された「フュアインズコンテスト」の運営代表を務めたときに、美を競うことが中心にあった従来のミスコンの良さを残しつつ、新しい価値を創り出す難さや意義を感じました。

私は将来、メディアを通じて、より多くの人が生きやすい社会になるための新しい価値観や気づきを届けられる人になりたいです。